

# 恢復期

堀辰雄

青空文庫



第一部

彼はすやすやと眠っているように見えた。——それは夜ふけの寝台車のなかであつた。

……

突然、そういう彼が片目だけを無気味に開けた。

そうして自分の枕まくらもとの懐中時計を取ろうとして、しきりにその手を動かしている。しかしその手は鉄のように重いのだ。まだその片目を除いた他の器官には数時間前に飲んだ眠り薬が作用しているらしいのである。そこで彼はあきらめたようにその片目を閉じてしまふ。

が、しばらくすると、彼の手がひとりで動き出した。さっきの命令がやつといまそれに達したかのように。そうしてそれがひとりで枕もとの懐中時計を手捜りてさぐしている。その動作が今度は逆に、彼自身ほとんど忘れかけていたさっきの命令を彼に思い出させる。

「まだ三時半だな……」

彼はそうつぶやくと、一つ咳せきをする。するとまた咳が出る。そうしてその咳はなかなか止やみそうもなくなる。まだ一時間ばかり早いけれども仕方がない。もう起きてしまおうと彼は思った。——彼は上衣うわぎに手をとおすために身もだえするような恰かつこう好をする。やつとそれを着てしまうと、半年近くも寝間着でばかり生活していた彼には、どうもそれが身体にうまく合わない。ネクタイの結び方がなんだかとても難かしい。靴を穿はこうとすると、他人のと間違えたのではないかと思う位だぶだぶだ。——そういう動作をしながら、彼はたえず咳をしている。そのうちにそれへ自分のでない咳がまじっているのに気がつく。どうも彼の真上の寝台の中でするらしい。おれの咳が伝染うつったのかな。彼は何気なさそうに自分の足もとに揃そろえてある一組の婦人靴を目に入れる。

彼はやつと立上る。そうしてオキシフルの壇びんを手にしたまま、ステイムで蒸されている息苦しい廊下のなかを歩きだす。靴かばんにつまずいたり、靴をふんづけそうになる。一つの寝台からはスコッチの靴下をした義足らしいのが出ていて彼の邪魔をする。そんなごった返ししのなかを、彼はよろよろ歩きながら、まるで狂人かなんぞのように眼を大きく見ひらいている。……

そのときふと彼は、そういう彼自身の痛ましい後姿を、さつきから片目だけ開けたまん

ま、じつと睨<sup>にら</sup>みつけている別の彼自身に気がついた。その彼はまだ寝台の中にあつて、ごたごたに積まれた上衣やネクタイや靴のなかに埋まりながら、そしてたえず咳をしつづけているのであつた。

夜の明ける前、彼はS湖で下車した。

其<sup>そこ</sup>処からまた、彼の目的地であるところの療養所のある高原までは自動車に乗らなければならなかつた。途中で彼は、その湖畔にある一つのみすぼらしいバラック小屋の前に車を止めさせた。そこには、もと彼の家で下男をしていたことのある一人の老人が住んでいた。その老人はもう七十位になつていた。そうしてもう十何年というもの、この湖畔の小屋にまつたく一人きりで暮しているのだつた。ときどき神経痛のために半身不随になるということを聞いていたが、そんな時は一人でどうするのだろうか、その老衰した様子を見ながら彼は思った。「それにしても、何故こんなにまでなりながら生きていなければならぬのかしら？」そういう今の自分にはよく解<sup>わか</sup>らないような疑問がふと彼の心を曇らせた。そのバラック小屋の窓からは、古画のなかの聖母の青衣のような色をした、明けがたの

湖水が、ほんのりと浮んで見えた。——老人はいつか彼の前に古びた聖書を開いていた。そうして彼のために熱心な祈禱きしとうをしだした。だが彼はそれには別に耳を貸そうともしないで、ただ不思議そうに、老人の手にしていた聖書の背草せがわが傷いたんでいると見えて一面に膏こうや薬くのようなものが貼はつてあるのや、その老人のぶるぶる顫ふるえている手つきが何となく鶏の足に似ているのを眺ながめていた。そしてその二つものは聖書の文句よりも彼の心に触れた。まるで執拗しつような「生」そのものの象徴でもあるように。

療養所はS湖から数里離れたところのY岳ふもとの麓ふもとにあつた。

そうしてその麓ふもとのなだらかな勾配こうばいに沿うて、その赤い屋根をもつた大きな建物は互に並行した三つの病棟に分れていた。それにはそれぞれに「白樺しろかば」とか「竜胆りんとう」とか「石楠花しやくなげ」などと云う名前がついていた。彼の入った「白樺」の病棟はY岳ふもとの麓ふもとにもつとも近く、そこには他の患者もあまり居ないらしく、そしてその裏側はすぐ一面の雑木林になっていた。彼の病室からはベッドに寝たままで、開け放した窓を丁度よい額縁がくえんにして、南アルプスのまだ雪に掩おほわれているロマンチックな山頂が眺ながめられた。

彼の病室には南向きの露台が一つついていた。其処そこからならばS湖も見えるかも知れないと思つて、そこまで出て行つた彼はそれらしい方向には一帯の松林をしか見出みいださなかつた。が、その代りに彼は其処から、下の方の病棟のあちらこちらの露台に裸かの患者たちが日光浴をしている有様を一目に見ることが出来た。みんな樹皮のような色の肌はだをしなから、海岸でのように愉たのしそうに腹はら這ばいになつていた。

彼の想像はそういう人達と同じように日光浴をしている裸かの彼自身の姿を描いた。そして「わが骨はことごとく数うるばかりになりぬ」そんな文句を彼はふとつぶやいた。それはかの老人が彼のために読んでくれた聖書の中の一句だった。いちばん何でもないような文句を覚えていたものと見える。「わが骨はことごとくか……」それはいつの間にか話し相手のない彼の口癖になつてしまつた。

夕方になると、彼はひどい疲労から小石のように眠りに落ちた。

それから何時間たつたのか覚えはなかつたけれど、彼が目をさまして便所に行つたのは、だいぶ深夜らしかつた。彼は便所から帰つて、一種の臭においのただよっている病院の廊下を、同じような病室をNO.1から一つずつ丁寧に数えて歩いて来ながら、さて彼の病室である四番目のやつのドアを開けようとして、ひよいと部屋の番号を見たら、それはNO.5だつ

た。彼は部屋の勘定を間違えたのだと思って、すぐ廊下を引き返した。が、ひとつ手前の部屋に来て見るとそれはNO.5になっていた。おれは何と寝呆ねぼけているのだろう。自分の部屋の前を何遍も素通りする。そう思つてまた踵きびすを返した。が次の部屋まで来て見るとやっぱりさつきのNO.5であつた。まさかお伽とぎばなし 噺ばなし じゃあるまいし、おれが夜中に起きて便所へ行つてゐる間におれの部屋が何処どこかへ消えて無くなつてしまつてゐるなんて……：そうは思つたものの、彼はしばらくの間、電燈ばかりこうこうと耀かがやいてゐる深夜の廊下のまん中に愚かそうに立ちすくんでいたが、ふと其処にただよつてゐる臭いが過酸化水素の臭いだと気づくが早い、彼は彼の部屋のドアの外側の把手とつてには、何故だか知らないけれど、ガアゼの繻ほうたい 帯たい が巻いてあつたことを突然思い出した。そうして彼は、彼が何遍もその前を往復したNO.5の部屋のドアの把手がその通りであるのを認めた。おれはこのおれの手でさつきそれを握りながら今までこいつに気がつかかなかつたとは何事だい！（そこで彼は思いきつてそのドアを押し開けた。）やっぱりおれの部屋だ。空からつぽのおれがおれを待つてゐる。夕方、おれがそこら中に脱ぎ棄すてておいた外がい 套とう や上衣や襯衣シャツ や、それから手袋や靴下のようなものまでが、みんなそれぞれにおれの姿を髣髴ほうふつさせてゐる。……

彼はやつとこさ自身のベッドにもぐり込みながら、今しがたの変な錯誤をゆつくりと考



え直した。——つまり、病院にはZONAなんて部屋は始めから無いのだ。4は不吉にも死と暗合するから。で、おれの部屋は四番目であるのだけれど、しかも5という番号がつけられている。ただそれきりなのだ。……だが待てよ、その厄介な番号をもった部屋をすっかり持て余してしまったこの病院の建築師は、ひよつとしたら一種の魔法のようなもので、この隣りのおれの部屋にそれをすぼつと嵌<sup>は</sup>めておいたかも知れないぞ。そうしてその二重の部屋（つまりこのおれの部屋だが）、それは夢と現実とをくつつけたように、何処かですこしずつ喰<sup>く</sup>い違いを生じている。そうだ、こんな夜ふけなどあの露台に出てこつそり窓の外からこつちを覗<sup>のぞ</sup>いて見ると、丁度あの重屈折をする方解石のようなものを通して見たかのように、この部屋の中のものすべて、そしておれ自身までがぼんやり二重になって見えそうな気がする。

そのとき不意に前夜の寝台車の中のごたごたとした光景が彼に思い出された。いつまでも奇妙な半睡状態を続けている自分の身体からすうつと別の自分自身が抜け出して列車の廊下をうろうろと歩いている——そういう前夜の錯覚と、それから今しがたの変な錯誤とが何時<sup>いつ</sup>しかごつちやになって、なんだかウイリアム・ブレイクの絵の或る複雑な構図と同じような不可解さをもつて彼に迫りながら、ますます彼を眠りがたくさせた。

(二三日後の夜、彼は彼の部屋のドアの把手に人間の手みたいに巻いてあるガアゼの繃帯に内部から血のにじみ出ているのを認めた。しかし翌日になって見ると、彼の知らない間にそれは新しいガアゼに取換えられてあつた。)

そういう神経質な最初の一夜を例外にすると、そこへ入院してからの彼の病状はずっと順調であつた。高原の春先きの氣候とともに。

彼の病室の窓から眺められる南アルプスの山頂には雪が日毎ひごとにまばらになつて行つた。そしてそれらは遂に何かしら地球の齒むのようなものを剥むき出しながら、彼の窓に向つて次第に前進してくるように見えた。病人はそれを飽かずに眺めた。

だが、或る朝から急に雪が降りだした。そして一日じゅう小止おやみなく降つていた。もう四月下旬だというのに何と云うことであろう。そしてそれはその翌日になつても、翌翌日になつても止まなかつた。

そんな或る夜ふけのこと、あたりがあまりに騒騒しくなつたのでそれまでとうとうと眠つていた彼は思わず目をさました。眠る前にいくらか小降りになつたかと思われた雪はい

つしか吹雪ふぶきになっていた。その上に突風がそれに加つてゐるらしい。——そんな夜も露台  
 に向いてゐるドアや窓は医師の命令で細目に開けておく習慣だったので、それらの隙間すきま  
 には無数の細かい雪が突風そのものと一しよに吹き込んできて、そこら中に手あたり次第  
 に汚点をつけながら、彼の病室の中をくるくると舞つていた。……彼はそつと眼だけを毛  
 布のそとに出しながら夢心地ゆめごちにそれを見入つていたが、やがてそれらの活潑かつぱつに運動し  
 ている微粒子の群はただ一様に白色のものばかりでなく、それらのなかには赤だの青だの  
 黄だの紫だのがまじつていて、それらが全体として虹色にじいろになつて見えることに気がつい  
 た。その瞬間、彼はちよつと軽い眩暈めまいを感じはしたが、それでもなおその回転する虹に見  
 入つてゐると、それがいつしか彼に子供の頃の或る記憶を喚よび起させた。……  
 人が子供の彼のために幻燈を映してくれようとしてゐる。彼は闇やみの中をじつと見つめて  
 いる。レンズがなかなか合わない。その間、たださまざまな色彩の塊かたまりがぼんやり白い布  
 の上にさまよつてゐるばかりである。けれども或る期待のために子供は胸を躍おどらせてゐる。  
 うつとりするような瞬間が過ぎる。やつとレンズが合い、絵がはつきり見えだす。そこに  
 は雪のなかに一人の死んだ支那兵しなへいが倒れてゐる。子供はその凄惨せいさんな光景に思わず目を掩おほ  
 つてしまう。……

その子供のおれを、一瞬間うつとりさせていたのと同じような現実の罾わなが今のおれを落とし入れようとしているのだろうか？ おれは何かに瞞だまされているのではないか？——そう思いながら彼はなおも魅せられたようにその虚空に回転する虹に見入っていたが、そのうち突然、何処かでガチャリ！ と硝子ガラスの破れる音がした。と同時にあちらでもこちらでもそれと同じような物音が起った。ずいぶん沢山の硝子が破れたらしいな……と思う間もなく、彼の耳は彼自身のすぐ身ぢかに起つたらしいそれよりも数倍も大きな音響のために麻痺ひしたようになった。それは彼の部屋のなかで起つたものらしかったが、彼はそれを確かめようともせずに頭からすっぽりと毛布をかぶってしまった。そして彼は枕もとに用意してあるヴェロナアルを飲むとしたけれど、このまま何も知らずに眠ってしまうことも恐しかった。それからどのくらい時間がたったか分らなかつた。——ただその間も彼はたえず自分の眼底に、さまざまの色の微粒子がちらちらしているのをば感じていたが、そのうち不意にエレヴェタアの下降に伴うような感じで彼の全身がすうとしたすと同時にそれらの幻覚も一時に消えてしまった。それは明らかに眠りではなかつた。それはどこかしら脳貧血に似ていた。

本当の眠りはただその発作を長びかせるような作用をした。

彼がそういう一種の仮死から蘇よみがえつたのは翌朝の十時頃だった。もう風はすっかり止やんでいたし、露台を四五寸埋めている雪からは水蒸気がさかんに立ちのぼっていた。そのせいばかりでなく、その露台の眺ちようぼう望は、いつも彼のベッドの上から見えるのとは非常に様子が異ちがっていた。そしてそれが、彼の病室の窓硝子が跡方もなく破壊されているからばかりでなしに、その露台に通じているドアがその蝶ちようつがい番ごとそっくり剥はぎとられてしまっているためであることに彼は漸つと気がついた。硝子の破れる音は彼もうつつに聞いて知っていたが、あんなに巖がんじよう畳じようだったドアがこんなにまで破壊し尽されたことを昨夜少しも知らずにいたことが彼を気味わるがらせた。

南アルプスの山頂はまた一面に真白になりながら、いつの間にか彼の窓からずっと後へ退すっていた。それを眺めながら、彼が自分のいま生きていることを確かめでもするように、彼のもじやもじやになった髪の毛へひよいと手を触れたら、その一本一本が神経そのものであるかのように痛んだ。

彼は眠ることが出来なくなつた。

どうも夜中になると熱が出てくるらしい。ちよつと眠つたかと思つたとすぐ汗みどろになつて目がさめた。朝の体温が三十八度位で一日のうちの最高で、それから次第に下つて、夕方には最低三十七度位になつた。熱の系統が普通とは逆であつた。しかもそれがかなり秩序立つていた。夜、眠れないのはどうもそのせいしなかつた。

毎晩、十二時頃になると看護婦たちが彼の病室に見舞いにきた。彼はからかい半分彼女たちのことを「鳩ほつぽ」と呼んでいた。それは看護婦たちが鳩の歩き方を真似まねしているような恰好をして廊下を歩いてくるからだつた。そうして看護婦たちは彼の病室のドアをすうつと音のしないように開け、しばらく室内の様子をうかがいながら闇のなかに彼が眠つてゐるらしいのを確かめると、またすうつとドアを閉めて、再び鳩のような足どりで廊下を立去つた。看護婦たちのなかにはドアも開けずにその鍵かぎ孔あなから彼の様子を覗いて行くものもあつた。そんな時刻にはいつもまだ眠れないでいるところの彼は、そういう看護婦たちの行動を一つ一つ手にとるよう知ることが出来た。また、それまでうとうと眠つてゐるような場合でも、きつとそのへんな凝視を彼は神経に感じて目をさましてしまうのが常であつた。そういうとき彼はびつしより汗をかいていた。彼は看護婦たちの立去るのを待つてすばやくタオルの寝間着を裏がえしにした。——だが、そのうちにその深夜の訪問

は十二時に限らず行われるようになった。ずっとその時刻の過ぎた夜中の二時か三時になつて、まだ眠れずにいる彼はドアがひとりでに開いたり閉じたりするのを見た。誰かが鍵孔からじつと自分の様子をうかがっているのを感じた。しかもそれは一晩のうちは何回となく繰り返された。彼はその度たびごと毎にぞつとしながら、いつも眠った真似をしていた。そんな時彼の神経過敏になつた耳は、どうかすると夜ふけの廊下に何かの翼の音のするのを聞いたりした。

しかし彼はその子供らしい恐怖を誰にも訴えなかつた。彼はその不眠と熱のためであるらしい幻聴に彼自身を馴ならそうとした。そして子供たちが「鳩つばぽつぽ」で遊ぶようにそれで遊ぼうとしていた。——だが或る朝、院長は、彼に彼が肋膜炎ろくまくえんを再発していることを告げた。そして彼が夜ふけの幻聴のように聞いていた何かの翼の音は彼自身の胸の中から起るものであることを知らされた。

彼は夜毎に不眠に馴れていった。彼はむしろ夜眠ることを欲しなくなつた。眠ることは、彼には、ただ寝汗をかくことであつたし、そのあとで高い熱の、きつと出るような悪夢を見ることに過ぎなかつたから。だが彼は、不眠のまま、眼をあけたままで見てしまう恐しい夢はどうすることも出来なかつた。……そんな或る夜に見たところの一つの夢であつ

た。いつもは開けておく筈の窓をどうしてだかその夜は閉めておいたと見える。そとは月夜らしく、その閉じた窓の隙間から差しこんでくる月光が彼のベッドのまわりの床の上に小さい円い斑点をいくつも描いていたが、それはまるで彼自身がそこへ無神経にしちらした痰のように見えた。そういう変な光線のなかで、彼はふと彼の枕もとに誰かがうな垂れているらしいのに気づいた。ああ、Aが来てくれたな……（その瞬間Aがだれか別の人間に変ってしまった）……おお、Bだったのか、すまないな、Aとまちがえて。……おや、君はBでもないね、Cだったのかい……そんな風に、彼の枕もとにうな垂れているのは一人の男きりだったが、その男が誰だかやつと見当がつきそうになると、それはすぐ他の男に変ってしまった。相手の男がいつのまにか他の男に変っているようなことは、どんな夢にもよくあることで、そういう不思議な変化も大概の夢ではきわめて自然に感じられるものである。それが彼のその時の夢ではそう行かなかつた。その不思議な変化がどこまでも不思議で、その上それが一種の凄気のようなものをさえ感じさせるのだった。……そんな具合に彼が彼の知っていると思われるあらゆる友人たちを代る代る夢に見つくしてしまつた時分になつて、彼は漸つとその一見何でもないような、それでいてこの頃の彼の夢の中では、最も彼を苦しませたところの夢から自由にされた。熱がひどく出ているらしい。彼



はそれを測るために検温器を取ろうとした。だが、その検温器は彼の手から滑<sup>すべ</sup>つて床の上で真二つに折れてしまった。その瞬間、いままで窓の隙間から差しこんでくる月影だとかかり思っていたそこら中の沢山の斑点が、突然、彼の目に真赤に映った。そしてそれが本物の痰のように見えた。——おや、おれは何時の間にこんな血を吐いたのかしら？……彼は気味悪そうにそれから目をそらしながら、なんだかこのまま自分が死んで行くのではないかという気がされてならなかった。そうして彼は、今しがた夢の中で彼を苦しませたところの友人たちが、彼の死を知らせる電報を手にしたまま、さまざまに驚<sup>きよう</sup>愕<sup>がく</sup>している有様を、一つ一つ病的な好奇心をもつて描きはじめていた。……

彼がその何回目かの彼の「危機」から脱するためには、四週間たつぷりの絶対安静を要した。

六月に入ってから、或る日のこと、彼ははじめて露台に出ることを許された。彼は其処<sup>そこ</sup>から見えるあらゆる樹木がすっかり若葉を出しているのに眺<sup>なが</sup>め入りながら、目が痒<sup>かゆ</sup>くなるのを我慢していた。それらの樹木の多くが白樺<sup>しらかば</sup>と落葉松<sup>からまつ</sup>であることを知ったのも殆<sup>ほとん</sup>どそ

の時が始めてであつた。

熱は体温表の上で一時非常にジクザクな線を描いたが、そのジクザクは次第にその振幅をちぢめて行きながら、遂に完全に赤線（三十七度）以下になつた。だが、彼の身体はまだ何処となく不安定だつた。そしてひつきりなしに身体のあちらこちらに、丁度大地震のあとに起る無数の小さな余震のように、或は頭痛が、或は神経痛が、或は齒痛が次ぎ次ぎに起つた。彼はそれらの余震になおも怯かされながら、しかし次第に、露台のまわりでうるさいくらい嘔りだした小鳥たちの口真似をしてみたり、裏の山から腕いっぱい花を抱えて帰ってくる看護婦に分けて貰つて薬罈にさした竜胆や鈴蘭などの小さな花の香りをかぎながら、彼は生き生きとした呼吸をし出した。

或る日から彼も日光浴をすることになつた。

彼は看護婦から紫外線除けの黒眼鏡を受取ると、それをすぐに掛けながら子供のようないそいそと露台に出て行つた。そして彼は初夏の太陽をまぶしそうに見上げながら、それに向つて話しかけてもするように独語するのであつた。

「おお、太陽よ、おれも昨日までは苦痛を通して死ばかり見つめていたけれども、今日からはひとつこの黒眼鏡を通してお前ばかり見つめていてやるぞ！」



## 第二部

その後御病氣御順調の由、何よりも結構です。

もしお身体にお差障さしさわりないようでしたら当分こちらへ来てみませんか。今年ことしは西洋人の別荘を借りています。私一人きりですからどうぞ御遠慮なくお出でください。うちの寝台はぎいぎい鳴りますけれど。庭には沢山あなたの好きな羊齒しだが生はえていますよ。  
(しかしこれはうちの撮とったものではありません。)

七月の初めに、軽井沢に行っている彼の叔母から、美しく密生した羊齒ばかりを撮影した絵葉書が、まだ療養所にいる彼のところへ届いた。彼はすぐそれに返事を書いた。

絵ハガキを有難う。

僕はすぐにでも叔母さんの「羊齒山荘」へ行きたいのですけれど、院長がまだ許してくれません。でもあと一週間位したらと僕は院長と約束をしました。それまで僕はせつ

せと日光浴でもしていきましょう。僕は足ばかり出しているものだから、なんだかマホガ  
ニイ製の義足でもしているようになりました。左様なら。

七月も末になった或る朝、その「羊齒山荘」に突然、彼は、西洋人の好んで着るような  
派手な柄のスウエタアかなんぞ着込んで、妙にはしゃいだ姿をあらわした。手には籐とうのス  
テッキを持つているきりで、何処どこか散歩からでも帰ってきたような恰好かつこうであった。――  
雑草おが生いかぶさるようになって小径こみちの両側には、とりわけ羊齒が見事に生長してい  
たが、それが彼にはあたかも可愛らしい手をひろげて自分を歓迎している子供たちのよう  
に見えるらしく、彼を微笑ほほえませていた。……

その奥まったヴェランダに、彼の叔母がひとりで籐椅子よに凭りかかっているのを認め  
ると、

「叔母さん……」

そう彼は人なつこそうに元気のいい声をかけた。

「……そうしているところはまるで羊齒の女王みたいですわね」

「そう見えて?……女王なら、私は何の女王でもいいわ」叔母さんは彼にっこり笑って

見せた。

彼は靴のままヴェランダに上つて、そこにある籐椅子の一つにどっぴかり腰を下した。そうしてすこし荒い呼吸いきづかいをしていた。

「お疲れになつたでしょう。すぐお寝やすみにならない？」

「ええ……叔父さんは？」

「ずっと東京よ……また瘦やせつぽちが二人寄つてたかつてきつと笑うことよ」

「ふ、ふ、僕もここへ来る途中で考えたんですがね……」

「……………」

「あのね、昔はそれでも、叔母さんと僕とで目方を合せると叔父さんのよりは五キロ疋ぐらい多かつたでしょう。でも、もう駄だ目めなの。……僕はあの頃から見ると五疋はたつぷり減つてしまつたからなあ」

「そのかわり、叔母さんはすこし肥ふとつたでしょう？……」

そう言われても、彼はもう叔母さんの方を見ようともしないで、元氣なくじつと目をつぶっていた。……

その羊歯の密生している叔母の別荘には、去年まではスコットランド人らしい老夫婦がいかにも品よさそうに暮っていた。毎年の夏、彼は散歩の折などこのへんの草深い小径が好きでよくこの家の前を通つたものだが、その度たびごと毎にいつもその老夫婦がヴェランダに出て黙つたまま、お茶かなんか飲み合つているのを見かけたものだった。なんでも三十年近く日本で宣教師をしている人だそうだが、そんな宣教師というよりも寧ろむし哲学者かなんかのように見えた。この高原のどんな小径にでも勝手な名前をつけたがる西洋人に倣なつて、彼もこのへんの小径を自分勝手に Philosophen 《フィロゾフエン》 Weg 《ウエグ》 と呼んでいたくらいだったのに。……あの老夫婦もとうとう彼等の任期を了おえて故国にでも帰つたのかしら。——そう云えば、この老夫婦が他の亜米利加アメリカの宣教師たちと異ちがつて、いかにも趣味のいい、そして地味な暮し方をしていたらしいのは、彼等が彼等に代つてこの別荘に入るであろう人達のために残して行つた幾つかの古びた家具類、——例たとえば大きな寝台とか、がっしりした食卓とか、稚拙な彫りのある椅子などを見れば分かる。どれもこれも三十年ぐらひはごく注意して、傷一つつけずに、使い通してきたものらしい。たとえ異国であろうとも、こんな風にごく上等な品物をごく長い間使い慣らしていた老人たちの心柄

は、ただ質素であると云つてしまふにはあまり奥床しく思われる。——彼はそれらの家具類の間にちよこんとしてゐる一つのごく小さな椅子に、丁度五六歳の子供にしか掛けられないような一つの椅子にふと眼を止めた。その小さな椅子は木質の古びと云い、それに彫られてある模様の稚拙な感じと云い、いずれも他の古椅子とあまり変らなかつた。これはひよつとすると彼等が三十年前スコットランドから日本へ移住して来た時他の家具類と一緒に向うから持ってきた物かも知れない。そのとき彼等には丁度五つか六つぐらいになる子供が一人あつたのだろう……だが彼はこれまでついぞそういう彼等の息子むすこらしいものを見かけたことは無かつたけれど……その息子、と云つても今ではもう三十以上になつてゐるに違ひないが、彼は自分の職業のために一人で故国に帰つていたのであるだろうか、それとももしかしたらもう死んでしまつてゐるのであるまいか？……いずれにせよ、この可憐かれんな椅子がそれを見る度毎に彼等老夫婦の心を慰めていたであろうことは容易に想像される。そうしてこの別荘を立去る時、その老夫婦はこの椅子一つのためにどんなに心をなやましたことであらうか？

……それらの古びたいくつかの家具がしめやかに語りだすところの、そう云うロマンチックな物語に耳を傾けながら、それらの語り手の一人である、すこし彼には大き過ぎる寝



台の上に、到底眠れそうもないと思ひながら横になっているうちに、彼はいつしかすやすやと寝入った。……

夕飯のときである。彼は叔母と一しよに食堂の、それひとつあれば七八人ぐらいのお客には充分間に合いそうな、大きな円卓まるテーブル子につこうとして、きて、それがあんまり大き過ぎるので、何処へ坐つたらいいのかまごまごした。

「どうも具合が変だなあ……」

「すこし遠くても、向い合つて坐つた方がよくつてよ。……でも、二人になつたから、これでもまだ恰好がつくのよ。私一人のときは、ほんとうに持て余してしまつた……」

彼は彼女の云うとおりに彼女と差し向いに坐つた。しかし、卓子の向側とこちら側で話し合うには、よほど大きな声を出さなければ聞えないような気がした。そこで彼は食事の間だけ沈黙することにした。そのかわりに彼は食事をしながら、その食卓掛けのよく洗せんた濯くしてあるけれど色がひどく剥はげちよろになっているのや、アルミニウムの珈琲コオファイイわか沸わかしの古くて立派だけれどその手がとれかかっていると見えて不細工に針金でまいてあるの

や、どれもこれもちぐはぐな小皿に西洋草花が無邪気に描かれてあるのやを一々丁寧に眺めまわしていた。これらの物もみんな前の老夫婦が置いていったものらしい。……

そのとき彼は、例の子供の椅子に関する彼の意見を叔母に話したい欲望を感じた。探偵小説ばかりを読んでいるせいか、他人の身の上などを空想することの好きな叔母はことによると彼よりもっと細かな観察をしているかも知れない。彼はしかしそれを言うのを止めた。彼には卓子の向側にいる叔母に向って普通より大きな声で話しかけなければならぬのが物憂かつたのだ。

一種の神経衰弱に罹つたところの病人は、二日も三日も平気で眠りつづけると言われる。数年前、彼はその軽いやつに罹つたことがあつた。——その時の症状が思い出されてならないほど、この頃の彼はひつきりなしに眠たい。すこし我慢して起きていると眠気で床上に倒れそうになる。病院での睡眠不足を一時に取戻そうとするがごとくに彼は眠りつづける。その病院では看護婦たちに持て余されたくらい神経質になつた彼は、ここでは——このしつとりした落着きのある山荘のなかでは、そうして彼の叔母のクラシツクな愛のな

かでは、彼はまるで母親に抱かれた子供のように前後を知らず深い眠りに落ちた。事実、彼はここへ来てからもう何日になるのか、十日になるのか、二十日になるのか、それとも一週間にしかならないのか、それすら思い出せない。そうして昨日のことが一昨日のことより昔のように思える。

叔母のところへは毎日のように彼女と同年輩ぐらいの女の客が訪れてきた。そういう女客ばかりが二三人一しよに落ち合うようなこともあつた。「みんな私の学校友達なのよ」叔母はそう言っていたが、いずれ叔母に聞いてみればそれぞれ由緒ゆいしよのある貴夫人たちなのであろうけれど、そういう貴夫人たちというものはどんな会話をするものかしらと、一度二階の彼の寢室からじつと耳を傾けて聞いていると、自分の別荘の裏の胡桃くるみの木に栗鼠りすが出たとか、野菜がどうだとか、薪まきがどうだとか、そんな話ばかりしているので彼はひとりで苦笑した。

そういう時には、彼は誰にも見つからないように、二階から降りてこつそりと台所の裏へ出て行つた。そこには落葉松が繁茂していて涼しい緑蔭をつくっていた。彼はいつもそこへ籐の寢椅子を持ち出してごろりと横になった。其処そこからはよく伸びた落葉松のおかげで太陽がまるで湖水の底にあるように見えた。どうかすると彼はそこでそのまま眠つてし

まうこともあつた。

そんな日のある日、もう客が帰つた跡と見えて、その裏庭に面したフレンチ・ドアに叔母がぼんやり凭りかかつているのを見つけると、

「叔母さん」

と彼はその寝椅子の中から声をかけた。

「ここにこうしていますとね、僕はきつとドロシイのことを思い出すんですよ……どうしてかしら？」

叔母さんはまだぼんやりしている。よほどお疲れになつたと見える。

「ドロシイは今年は来ていませんの？」彼はうるさく質問するのである。

「ドロシイさんの家は何でも去年カナダへお帰りになつたそうよ」

「そうですか。——おや、おや、僕は年頃のドロシイが見たかつたんだがなあ……」

……数年前、彼はそのドロシイの隣りの別荘に一夏を暮したことがあつた。やはり叔母と一しよに。——その頃ドロシイはまだ七つか八つ位であつた。彼はときどきそのドロシ

いや彼女の小さな妹たちと一しよになって遊んだ。ドロシイは綺麗な女の子で彼女の美しい名前によく似合っていた。日本語も上手だった。しかし彼と話をしているうちに日本語が分からなくなると英語でしゃべった。そうして英語などで人としやべったことのない彼を一ちよつと寸黙じゆめらせた。そういう時いつまでも彼が黙っていると、彼女は何だか困ったような真面目な表情で彼を見上げるのであった。彼はそういう表情を美しいと思った。——或時、彼はドロシイとその小さな妹とを連れて、オルガン岩のほとりへ散歩に行つた。その散歩の間、ドロシイは絶えずはしゃいでいたが、その帰途、突然一つの小さな崖がけの上へよじのぼってしまった。それは彼女によじのぼることはどうか出来ても、そこから下りてくることは危険に思われるほどの急な傾斜だった。どうするだろうと思つて見ていると、ドロシイはちよつとその傾斜を見て首をかしげていたが、いきなりそこを駈かけ下りてきた。あぶない！ と彼が叫ぶのと殆ど同時ほんどんに、彼女は途中で足を滑すべらしながら、彼の足許あしもとへもんどり打つて落ちてきた。……しかし彼女はすぐ起き上つた。見ると彼女の白い脛はぎには泥がつき、何かで傷つけたらしく血が滲にじんでいた。彼女はしかしそれを見ても泣かずにはいた。ともかくもすぐそのホテルまで連れて行つて何とかしてやろうと思ひながら、その怪我けがをした少女とそれからもう歩き疲れているらしいその妹とを二人、両手に引張つてホテル

に向つて歩いてゆく彼の方がよほど気が気でなかつた。そのうち彼はこりや俺おれの方がすこしあやしいぞと思ひ出した。……彼はどうかした機会に、血を見ると、それが自分のであらうと、他人のであらうと、すぐ脳貧血を起してしまふ癖があつた。そうして今も今、彼はドロシイの白い脛はらいろに薔薇色の血が滲み出ているのを見ているうちに、どうやらそいつを起したらしいのである。彼はホテルの玄関の次第に近づいてくるのを、うるさく顔にまつわりつく蜘蛛くもの巣のようなものを透して、やつとのことで見分けていた。……

「ブランデー！ ブランデー！」

一人の西洋人がそう叫んでいるらしいのを彼はすぐ顔の近くに聞いた。それから彼は、自分がホテルの床板の上にあおむけに倒れながら、誰かに自分の足を宙に持ち上げられてゐるらしいことに気がついた。それと同時に甘つたるいような香水のかおりを彼は臭かいだ。彼を介抱してくれているのは西洋人の夫婦らしかつた。

「ブランデー！」

彼の足を持ち上げていてくれるその西洋人は、漸ようやく意識を回復しだした彼の上にかがみながら、ボオイの持つてきたらしい琥珀色こはくいろのグラスを彼の唇くちびるに押しあてた。彼はそれを一息に飲み干した。

「……………?」

彼はその親切な西洋人たちにどんな言葉で感謝を示したらいいのか分らなかつたので、ただにつこりと笑つて見せた。

その時彼の額へ手をやっていたその細君らしい西洋婦人がひよいとうしろを振り向いたので、その方へやつと頭を持ち上げながら彼も見てみると、ホテルのポオチのところドロシイとその妹は、丁度ホテルへ遊びにでも来ていたと見える彼女らの友達らしい五六人の少女たちに取りかこまれていた。そうして一種の遊戯かなんぞをしているように、ドロシイの説明を聞こうとしていくつもの金髪をひとところに集めているそれらの少女たちの姿は、まだすこし頭の痺しびれている彼には、あたかも葡萄ぶどうの房ぶさのようにゆらゆらと揺れながら見えた。……

……ここにこうして居ると、そういう数年前の光景の一つ一つが、妙に生き生きと彼の心のなかに蘇よみがえつてくるのは、どういう訣わけかしらと考える度毎に、彼はこの樹蔭こかげに何かしら一種特別な空気のあることに気づかないではなかつたけれど、つい面倒くさいので彼はそ

れをそのままにしておいた。だが、或る日のこと、いくらか気分よかつた彼はその原因を調べてやろうと思ひ立つた。その樹蔭は奥へ行けば行くほど彼が名前も知らないような雑草が茂るがままに茂つていた。これはきつとこの雑草の中に何か特別な香りかおを発するものがあつて、それが彼の記憶を刺戟しげきするのもかも知れないぞと思つた。そこで彼はこの雑草のなかを鼻孔をひろげながら出たらめに歩き廻つてみた。なるほど、何かが特に強く匂におつてゐる。——それを嗅いでいると、なんだか氣持がすうすうしてくる。おや、おれはまた脳貧血をやりそうだぞ、と彼がちよつと錯覚を起しかかつたくらい、その香りは彼の発作の直前の氣持を思ひ出させる。こいつだな、と思つて彼はその香りをたよりに、その香りの生じていそうなところをむきになつて捜したけれど、それが一面に茂つてゐる雑草のどの辺であるのかすら一向に見分けがつかかなかつた。だが、その香りは何処かしらからますます鮮明に匂つてくる。彼はそこにぼんやり佇たたずんだまま、何となく自分が盲目になつたような感じさえ持ち出した。……

だが、彼は遂ついにその香りの正体を捜しあてた。彼の足が偶然にもそれを踏んづけたのである。彼の足もとには、暗緑色の細かい葉をもつた草が一かたまりになつて密生してゐた。その一つを手折つて見ると、その葉は縮ちりめん緬しわの皺しわのようにちぢれていて、それが目にしみ



るほどの強烈な光りを放っていた。何かの匂いに似ていると思ったけれど、どうしてもそれが思い出せなかった。彼はそれを叔母のところへ持って行った。

「叔母さん、これ、何という草だか知っていません？ これですよ、僕にドロシイのことを思い出させるのは……」彼は二三年前の発作のことを思い出しながら言った。

叔母はそれを手にとって見てちよつと嗅いでいた。

「なんだか薄荷はっかみたいな香りがするわね。薄荷草というのじゃないこと？」

「あ、そう、そう、こりゃ薄荷のにおいでしたね……」

彼が発作を起すときの何となく快よのような気持は、丁度このにおいを嗅いでいるときの気持にそっくりであることに彼はいま始めて気がついたのである。それは彼には一つのすばらしい発見のように思われた。

まだ八月の半ばを過ぎたばかりなのに、もう秋風らしいものが周囲の木の葉をさわさわ揺すぶっているのを耳にひやりと聞きながら、或る朝、彼が二階のベッドの中でいつまでもぐずぐずしていると、突然戸外でマグネシウムを焚たいたような爆音がした。それと同時に家全体がはげしく動揺した。

「浅間山よ……早く来てごらんさいよ」階下のヴェランダで叔母が叫んでいるらしかった。

彼は寝間着の上に上着をひっかけてヴェランダへ降りて行った。

「僕はまた写真屋がマグネシウムでも焚いたのかと思った。それにしても朝つばらから変だと思っただけだ……」

なるほどヴェランダからは、浅間山がその花キヤベツに似た噴煙をむくむくと持ち上げている何とも云えず無気味な光景がはつきりと見えた。その無気味な煙りの中には、ときどき稲妻いなづまのようなものが光っていた。その閃光せんこうは熔岩ようがんと熔岩とがぶつかって発するものだということ、去年の夏、彼は人から聞いていた。

彼はその凄じい噴煙を見上げながら、丁度今の自分と同じようにそれを見上げていた去年の夏のまだいかに健康そうだった自分の姿をひよくり思い浮べた。そうしてそれに比較すると、今の自分の方がかえって夢の中にもいるような気がしてならなかった。：

もうヴェランダはうすら寒かった。

彼は客間にはいつて行きながら、こんな朝はもう煖炉だんろを使うのも悪くはないなと思った。

彼はこの別荘に来た時から、その客間の片隅かたすみに古い熔岩を組み合せてこしらえられてある山家らしい煖炉に目をつけ、それを一度使つてみたいと始終思つていたのである。それで、その朝、とうとう彼は女中に言いつけて松の枝をどっさり持つて来させた。そうして自分で煖炉の前にしやがみ込みながら、それを焚きつけにかかった。

やっとその小枝に火が燃え移つて、ぱちぱちとそれが快活な音を立て出すと、叔母も自分の椅子をその火のそばに近づけた。

「そうしているところは、あなたも随分丈夫そうになつてね」叔母が言った

「そうですか。——でも、もうかれこれ一年になるんですからね……ねえ、叔母さん、僕ね、去年二回喀かっけつ血けつしたでしよう。……最初の時は、どういうもんだか気持がよかつたくらいでしたよ。そりや何しろ生れて始めてなので、びっくりしたことはびっくりしたけれど、もうこのまま死んで行くのだと思つたら、かえつて落着いてしまったのでしようね。……だけど、二度目のときはほんとに厭いやだつたなあ。——あの時はもう、ひよつとしたら助かるかも知れないという気がしていたもんだから、かえつて慌あわててしまつて、僕は無理矢理に咽喉のどから上げてくる血を半分ばかり飲み込んでしまつたんだからなあ。そのあとの気持の悪いつたらなかつたし、医者には叱しかられるし……僕はあの時くらい人間の生きよう

とする意志を醜く思ったことはないなあ……」彼は何時かひとりごとのように言いつづけていた。が、ふと彼のそばに叔母が何だか煙ったそうな顔をしているのに気づくと、彼は強いて口をつぐんだ。そうして一本のくすぶっている小枝をいじくっていたが、その様子には何処か言いたいことがどうしても言えないでそれをもどかしそうにしているようなところがあつた。恐らく彼は叔母に向つてこう言いたかつたのかも知れない。……

「叔母さん、そんなに僕が生きていればいいと思えますの？」……  
そうして二人はそのまましばらく黙っていた。

そのうちにさつと何かが木の葉の上に降つてくる音がし出した。それは乾いた雨のよう  
な音だつた。

「浅間の灰かな？……」叔母はそうつぶやくと、そつと立上つて窓ぎわへ寄つて行つた。

## 青空文庫情報

底本：「燃ゆる頬・聖家族」新潮文庫、新潮社

1947（昭和22）年11月30日発行

1970（昭和45）年3月30日26刷改版

1987（昭和62）年10月20日51刷

初出：「改造」

1931（昭和6）年12月号

初収単行本：「ルウベンスの偽畫」江川書房

1933（昭和8）年2月1日

※初出情報は、「堀辰雄全集第1巻」筑摩書房、1977（昭和52）年5月28日、解題によろ。  
入力：kompass

校正：染川隆俊

2004年1月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 恢復期

堀辰雄

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>